

高校生における友人と自我発達および時間的態度との関連
年上の友人が齎すもの

立命館大学応用人間科学研究科
臨床心理学領域
枝廣 和憲

問題と目的 青年は自我発達に伴い、葛藤を経験する。この際、その葛藤をうまく処理できないと「青年期の自我発達上の危機状態」に陥る(長尾, 1989)。この自我発達の中核をなす自我同一性の確立と拡散に伴って、時間的展望とその拡散が顕在化する(Erikson 1968)。時間的展望の一つに時間的態度があり、これと自我同一性との関連が示されている(西平, 1979 他)。この両者に友人関係が影響し、この友人関係に関して様々な側面から検討されている。友人には異性の友人もあり、同年輩の言葉からしても異なる年齢の友人もあるが、これまでの研究は友人を「同性同年輩」に限定している。また, Vygotskii(1962)の「発達の最近接領域」の概念や白井(2006)の「一步前にいる存在」が重要であることから、特に年上の友人が自我発達や時間的態度に対して影響を与えられると推測できる。本研究は、高校生の友人関係において、年上・異性・学外といった属性の異なる友人がどの程度存在するかを探索的に探り、友人属性と自我発達および未来に対する時間的態度との関連を明らかにすることを目的とした。

方法 調査は 2006 年 10 月～11 月に S 県私立 A 高等学校生 1 年生～3 年生 251 名(男子 92 名; 女子 159 名, SD: .962)を対象に分析を行った。フェイス, 友人の性別×学内外×年齢差の 12 分類ごとの友人数, 友人の属性・職業・性別と, 同年/年上の友人それぞれとの友人関係(榎本(2003)の相互理解活動尺度及び相互尊重欲求尺度, 自我発達上の危機状態(長尾(2005)の A 水準(葛藤水準)・B 水準項目(不適応水準), 未来に対する時間的態度(白井(1997)の未来に対する時間的展望体験尺度)を調査した。

結果 現代の高校生には同年(同学年)だけではなく年齢差のある年上の友人がいることが確認された。青年期特有の葛藤状態に最も影響を与えている分類の友人数は、3 学年とも「1～2 歳年上の友人(同性)」, 2・3 年生で「1～2 歳年上の友人(異性)」であった。このことから、「1～2 歳の友人」を持つことは、青年期特有の葛藤状態を安定させるものと示唆された。時間的態度に影響を与えたのは「年上の友人」であった。このことから、1・2 年生にとって年上の友人は未来に対する時間的態度を肯定的にするものであると示唆された。

考察 高校生は、重要な他者が親のようなタテの関係から、同年友人のようなヨコの関係に移行する時期である。ナナメの関係である年上の友人が、未来の自己像として、親のような遠い存在でもなく、同年友人のようにほぼ同じ存在でもなく、少し年上の友人は遠からず近からずの存在であり、その存在とかがかわることで、未来の自己像を肯定的に捉えることができ自我発達の危機状態が安定したと推察された。